
嘲笑 [新潮新人賞応募予定作品]

月影舞月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘲笑 「新潮新人賞応募予定作品」

【Nコード】

N2384V

【作者名】

月影舞月

【あらすじ】

とある家庭の、ひとつの悲劇。その父子家庭の息子は、ペットの猫に自分の意見を語るといふ癖を持っていた。しかしある時を境にそれをぱったりとやめ、幼少期に母にもらったぬいぐるみに愚痴や疑問をぶつけていた。そして彼は大学卒業を間近に控え、ストレスによって自傷行為を行う。彼の猫はそれを冷めた視線で観察し、しかしそのぬいぐるみの笑顔が嘲笑にしか見えないことに気づいた。彼の父は息子の精神疾患を少しでも和らげようと努力したが、しかし息子は発狂し、猫を道連れにして自殺する。彼の父は、己の無

力さを痛感しながら、最後に別れた妻に事の顛末を話し、生きる道を選んだ。

彼らに向けられたものは、嘲笑だけだった。

—

一ヶ月ほど前に、彼は変貌していた。ついこの間までは、青春とは恋愛である、だとかキャンパスライフについて自分の意見を語ったりなどと学校に関わる様々なことの何たるかを吾輩に向かって豪語していたくせに、最近ではその影も見えず、その情熱的な性格はなりを潜めた。

吾輩にとつて、彼の長つたらしい結論のない説教を聞いておくよりも、黙ってくれたほうが良いことなのだが、彼を通じて無駄な知識や人それぞれ違う偏見の一つを知りうる事が出来ていたため、それがなくなるとても退屈だ。彼に向かって話してもいいぞ、と言つたとしてもぶつぶつと何事かを呟くばかりで、また、目の下には深い隈が出来ていた。

どうやら最近は何ておらぬらしい。暗澹たる表情に彩られていることから精神的にもどこか参っているのだろう。今、彼は男のくせに熊のぬいぐるみをぐにぐにとしながら、何事かをとても小さな声で説教している。ぬいぐるみはいい面の皮だが、しかし吾輩にはなくぬいぐるみに豪語するようになったのかと思ひ聞き耳を立てると、何やら意味深なことを呟いていた。

二

大学を卒業したらどうしよう、と僕は熊のぬいぐるみに問いかけた。僕の足元で、僕をじつと見つめる彼は、奇異の視線を向けていて、しかし今の僕にはそんなことを気にする余裕がなかった。彼にこんなことを聞いたところで返ってくる答えには予想がついていなかった。それで傷つくかもしれないのだったら、何も答えはしないぬいぐるみに話しかけたほうがいいと思ひ、この間から僕は彼と話さなくなつた。だから、子供の頃に、今はいない母にもらつたこの

ぬいぐるみにずっと話しかけている。

大学卒業したらどうしよう。就職できなかったらどうしよう。僕の成績でちゃんとした企業に雇ってもらえるだろうか。三十歳までに定職につけなかったらどうしよう。今付き合っている恋人に別れられたらどうしよう。……

様々な不安が僕の口々から飛び出して、ぬいぐるみに浴びせられる。彼ならばなんと返事をしてくれるだろうか。

ぬいぐるみは何も言わない。

その顔に貼りつけられている表情は僕を嘲笑っているように感じられて、僕はぬいぐるみを床に叩きつけた。

その柔らかい体を打たれ、小さな悲鳴がぬいぐるみから発せられる。だが口元に浮かべられた嘲笑は、歪むことなくしつかりと僕を捉えている。それが怖くて、僕はそれを踏みつけた。何度も、何度も、踏みつける。縫い目の内側からその白い肉が少しずつ飛びでる。

何だか気味が悪く、自分の近くにあることが怖くて、僕は、今まで大切にしていたぬいぐるみを蹴り飛ばした。それは部屋の壁に叩きつけられ、しかしその嘲笑はまだ僕を捉えていた。……

三

吾輩は飛んできたぬいぐるみをひよいと躲し、彼の様子が一段とおかしくなったことに落胆した。また、その粗雑な行動に呆れはてた。あれではいつ狂人になるか解ったものではない。近くにいる吾輩に危害がいつ加えられるか、たまったものではなかった。日常のストレスから発狂した狂人は、近くのモノを壊す傾向が強いとか。もしもそれで吾輩が殺されたら、訴えてくれる者はいるだろうか。……おそろくない。そもそも人間の法は吾輩には適用されない。死後のことに不安になりつつも、吾輩はついに発狂した彼を見つめた。意味を持たない奇声を発し、壁に頭を叩きつける。額から血が溢れ、その紅を認識するたびに、その動きももっと激しくなる。

それが、本当に狂っている者の行動だった。自傷行為にはしつたとしても、このような例は見たことがない。吾輩は彼の行動を見ることをやめた。危害を加えられる前に逃げ出すために、半開きの扉からするりと抜けだした。

ふと視線を感じて背後を見ると、あの熊がこちらに笑いかけていた。

それが、臆病者を罵る嘲笑に見えた。

四

血が出る。視界が真っ赤に染まっていく。死ぬ、死ぬ、死ぬ、……そうやって僕を罵倒する声が聞こえ、見えない、けれど僕の後頭部をガツチリ掴んだ手が僕を壁に叩きつける。血が流れる。痛い、痛い、痛い、痛い、痛い痛い痛い！

叫ぶ。けど止まらない。見えない手は僕を殺す気なのだろう。すでに壁一面に血がこびりついて、それは壁のしみになっていつまでも残るだろう。一体僕が何をしたというのか。

ふと気になって、視線を横に向けた。

僕の姿を嘲笑うかのような笑顔が、そこにあった。

五

部屋から出ても、彼の行為によって生じる固体音や彼が発する声は筒抜けだ。だが、その音に負けずとも劣らずの音を響かせる最大の要因は、屋外には聞こえないほどきつちり防音しているのに、屋内なら音が筒抜けになるといふ、一風変わった構造のためだ。

リビングに聞こえないくらいに静かにしてほしい。だが、彼の父はそんな彼の様子に興味がないのか本をぱらぱらとめくっている。

精神科医である彼の父は、彼が落ち着くまで本を読むと決めたようだ。

吾輩はその膝の上に飛び乗って丸くなった。外ではひぐらしが鳴いていた。

確か、彼の母は彼の異常な行動が原因で別れたはずだと、何故か思いだした。

精神科医ならば彼らの異常な行動を止めることもできるのではないかと考える。吾輩が精神科医に『精神面では万能』という偏見を持っているだけかもしれないが、この家の外で働く男の姿を知らないために、実際には何も出来ない腑抜けなのではないのか、と疑ってしまう。

抗議の声を上げようとして、上からの音が止まった。彼の父はのっそりと立ち上がり、テーブルの隅に置いてあった眼鏡を掛け、彼の部屋に続く階段をゆっくりとした歩調で歩いていった。

そんな背中を見て、思わず嘲笑が湧き出た。

六

部屋に入ると、飛び込んできたのは一面の赤。それと、厭な臭気。その原因は息子だった。額から流れる血は、俺が中に入る直前まで自傷行為を行っていたことが察せられる。何度も額を打ち付けた跡の残る壁には紅色の絵の具が撒き散らされていて、それが床に垂れて、様々な形を作っていた。

私は息子に尋ねた。

「どうしてそんなことをしている？」

「誰かが僕を掴んで叩きつけるんだ」

という答えが、即座に返ってきた。彼は、学校でも同じことをされたことがあったと答えた。おそらく、中学校時代の虐めのことだろう。何故この時期に自傷行為が始まったのかは解らないが、おそらく大学生活ももうそろそろで終わり、プレッシャーが神経質な性格に拍車をかけているのだろう。

このような自傷は神経質な人によくある。タイミングから考えて、

自分の判断は正しいはずで、ストレスから来る自傷行為だと私は断じた。

だが、別の可能性があるかもしれない。そんな不安に私は襲われた。……しかし一度動き出した思考が止まるはずがなく、私は患者に行うように質問を続けた。

精神疾患の治療が短期間でできないと解つていながら、道化のよう

うに。

そんな私を、息子のぬいぐるみが見ていた。

七

小さく浮かべているのは、嘲笑なのだろうか。

気になって、吾輩は彼の父の後を追った。そこで見たのは、道化のような彼の父と、落ち着いて、しかしどこか狂っている彼の二人だった。

そしてふと、彼らは、自分に似ていると思った。吾輩は猫でありながら、彼らの思考を理解することができていた。その原因は、吾輩が野良だった頃の経験だ。群に属することを許されず、いつ襲われるか、不安に慄く日々。……それを、鮮明に憶えている。いまでも時たま、吾輩は夢にその時の事を思い出す。あの時は、吾輩は彼にそっくりの狂人、今は、彼の父にそっくりの道化のような日々。

気づけば、ぬいぐるみがこちらを見ている。

吾輩の生き方を嘲笑っているのだろうか。

八

不安に取りつかれた息子が死んだ瞬間を、私はしっかりと覚えて

いるんだ。見たものにしか解らない、苦悶に彩られた表情、体中を掻き毟って出来た引掻き傷に、そこから流れる艶やかな血、……こ

の話をして本当に済まないと思っっている。君は私の唯一の理解者だ。しかし、相談に乗ってくれたからといって易々とこのような話をするのは不謹慎だと思っっている。

だけどここは人の少ない喫茶店だ。BGMが大きくて、声が聞き取りづらいことでここは有名なんだ。君をここに呼んだのも、それが原因だ。

……すまないね。聞いてもらえると助かる。

そう嫌そうな顔をしないでくれ。自分の息子に関わる話なのだから、君も知りたいだろう？ なんせ女である前に人間だからな。…

…ふふ、「そんな厭な言い方を聞くのは久しぶりだ」と言われても、私はこのような性格だと君はしっっているだろう？

三日前だ。……息子が発狂して、自殺した。その前にも一度発狂したのだがね。原因は解らない。推測は、前回のとおりストレスなのだろうが、しかし今回は少し違った。

私は息子に話を聞きたくて、部屋に入った。すると、何かにそうされているかのように、息子は何度も壁に頭をぶつけていたよ。…ここまでは前回と一緒なのだがね、しかし今回はその間にはつきりと意味のある言葉を発していた。

なんて言っていたかって？ 『ウインVim パティオールpatior』だよ。…

…ラテン語で圧迫に耐える、という意味さ。学校に嫌々ながら行っていたし、社会的ではなかったから孤立気味だったのかな。普段から人の輪に入らずに、面倒事ばかり押し付けられてうんざりしていると言っていたね。このころになると、大学は休みがちだ。

とにかく、入った途端に目についたのは壁についた血の跡さ。驚いたことに、前回額を叩きつけた後と同じ場所に、同じような自傷行為を行っている。血の跡は、今回のほうが余程酷かったがね。それと、息子がまだ子供の頃に誕生日にプレゼントしたぬいぐるみが、息子の奇行に対して笑みを浮かべているということが、目についた。ぬいぐるみが笑顔なのは当たり前か。ハハッ、その笑顔が嘲笑に見えていたのは、息子もかもしれないけれどね。飼っていた猫

も一階に降りてきたときに毛を逆立てていたから、それを恐れていたのかも知れない。

前回と同じ場所に、あのぬいぐるみは座っていたんだよ。その時も、私や、息子や、猫を嘲笑っていたような気がしたよ。

……馬鹿な話はよそう。私は息子の奇行を止めようとは思わなかった。下手に止めると、さらに激しく行く可能性があったからね。落ち着いてから質問したんだが、答える前にならず、Vim p a t i o r、V i m p a t i o r……と言っていた。

それもなくたって、精神面の安定期に入ってきた頃かな。コーヒーでも持つてこようかと息子に聞いたんだ。私も喉が乾いたのでね。ゾツとしたよ。いきなり、先程の有様が嘘のように冷静になっていたんだ。「お父さん、僕にも頂戴」と、そう言った息子に、私は驚愕を隠し切れなかった。それから一言二言言葉を交わして、一階に降りたんだ。

あ、店員さん。ストレートのコーヒーを一杯。君はどうする？

……はは、君らしい答えだ。注文はそれをお願いします。

小休止としようか。……続きが気になるからって急かすなよ、私も昔話がしたいんだ。……いや、君にとって、私はある意味敵だからな、やめておこう。

話を続けよう。それが私たちのためにもなりそうだ。

下に降りると、猫は自分に爪を立てて血まみれになっていた。それで思った。ああ、こいつも狂い始めている、と。息子に一番近かったからな、あの猫は。息子の一番の理解者は彼だっただろう。

その光景を見ても、私はなんとも思わなかった。まあ、自分に爪を立てている猫をどうにかするよりも冷静になった息子の治療が先だと思つてね。お湯をわかす間に私は救急箱から包帯を取り出して応急処置の用意をしていたんだ。そしたら、二階から、額から血を垂れ流す息子が降りてきてね。……彼が眼鏡を掛けている姿を見ているのも久しぶりだがね、正直、背筋が凍った。「お父さん、コーヒーは自分でも入れられるから包帯を巻いてよ」と、言つてね。私

はそのとおりにしたよ。そしたら、「ありがとう」と言っ
て、それから椅子に座った。それで、私がコーヒ
ーを淹れた時だ。何を思ったのだらう、息子が、ポ
ケットの中からカッターナイフを取り出して、いきなり私を突こうとした。咄嗟に下がらなかつたら、腹部に突き刺さっていたらう。それで、身の危険を感じたんだ。冷静すぎる息子に恐怖を抱いたよ。彼は立ち上がると、じりじりと私との距離を詰めようとする。私は勿論、息子と距離をとった。

そして、奇妙な叫びを上げて私に刃を突き刺そうとした。こんどは、心臓を狙っていたよ。それを鞆で受け止めたら、刃が抜けなくなったようだね。力を入れて抜こうとしていたところを、私は押し倒したんだ。頬を一、二回叩いて「何をするんだ」と怒鳴る。……すると冷ややかな瞳で、彼は私に嘲笑を向けた。それで、私は一回目の発狂を思い出した。あの、ぬいぐるみのような笑みを私に向けただよ。……君の言うとおり、狂っているのは私かも知れないけれどね。君は見ていないから解らないんだ。

とにかく、私の知る限り、息子の嘲笑は今回が初めてだ。

そして、「victim patriot 父さんは圧迫に耐えたことはあるの？」と、尋ねた。私はその言葉の意味を理解しようとして、けれど息子は隙をついて私の腹を殴ると、鞆に突き刺さっていた武器を取った。それで私を突き刺そうとしたんだ。その手を払って、カッターを飛ばした。

そこで、また嘲笑が私を捉えた。

「殺してくれ」と彼はいった。私には無理だった。彼は失望したように溜息をつき、私には目もくれず、カッターナイフを手にとった。もう私には興味がないようで、ビクビクしながら私は彼を見ていた。すると、彼は自傷行為を繰り返している猫の腸にそれを突き刺し、そのまま振り回した。腹が裂かれ、腸が抉り出され、内蔵が飛び出し、それらは一種の芸術を創りだしていったよ。それをみて呆気に取られた私は、満足そうな笑みを浮かべた息子が、「victim patriot」と遣して、動脈を切ったのを止めることは出来なかつた。

慌てて駆け寄ったがもう遅い。息子は、一面に嘲笑を貼り付けて息絶えていた。そして、その横で猫が「みゃあ」と、嘲笑うかのように私たちを見ながら鳴いて、……
ああ、君も私を嘲笑うんだな。
何も出来ない無能、と。

……悲しいね、私の愛すべき理解者も、いまや敵となり果てた。生きる意味もないようだな。けれど、私は、どれだけ嘲笑を浴びせられても生きていたいんだ。
そうしないと、息子の気持ち解らないような気がしてね。……

九

彼とは、これが最後でした。私は彼と別れ、夏の熱い中、日傘をさして歩きました。油蝉の声が煩く、これを風情と思う人が狂人のように私は思えました。

彼は、生きると言いました。私はそれに、何といえればよかったのでしょうか。

頑張つて？ それとも、お大事に？

考えても、答えは出ません。しかし、私は己の行動を恥じようとは思いません。暗い影を落とした彼の顔を見て、思いつきり嘲笑つてやったことに、後悔を感じることはないでしょう。

これが、私のけじめなのかもしれません。

誰かは、こんな私を嘲笑うのでしょうか。

(後書き)

一定期間公開したあと、この作品を削除します。それまで公開し、皆様からの批評を頂きたいと思っています。誤字脱字、改善点や文法的な誤りを指摘してくださる方は、感想欄に批評をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2384v/>

嘲笑 [新潮新人賞応募予定作品]

2011年7月30日03時22分発行